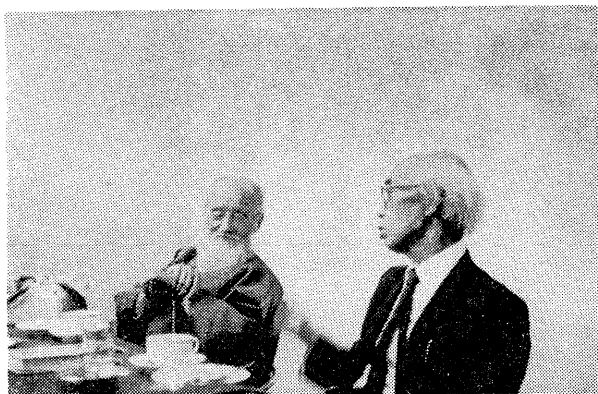


対談

最近の教育はさっぱり わからない

浅野順一／周郷 博



浅野順一先生は、教会の牧師さまです。

岩波新書の『ヨブ記』、『詩篇』の御著書を通じて、御存知の方も多いことでしょう。

先生は、明治三十二年（一八九九）、十二月十二日のお生れで、現在七十八歳でいらっしやいます。今でも日曜日には、砧教会、そして新泉教会を交互に行かれ、日曜礼拝の説教をなさっております。また、昨年末には『モーセ』（岩波新書）を御執筆になるなど、心の張りを失われない研究者でもあります。

中国の旅から帰られたばかりの周郷先生と浅野先生とのこの対談は、赤間さんの尽力でこのような記事にまとめることができました。

—— 編集部

秋晴れのある午後、排気ガスがよどんでいるような六本木の街角からほんの少し奥へ入ったK会館の一室で、浅野順一先生と周郷博先生にお話をうかがいました。ここも都心には珍しく緑にかこまれ閑静な場所

でしたが、それにもまして少し興奮気味の周郷先生と話される浅野先生のもの静かなようですが、とても印象に残りました。

まず、お若いころに浅野先生のお宅に三年ほどいらしたとおっしゃる周郷先生に「あなたはこうして私の家に來られたの？」とやさしく浅野先生がお聞きになって、この対談が始まりました。

昔がたり——浅野先生とめぐり合う

周郷 私は小さいころ新聞配達をしたり、夜学の電機学校へ通ったりいろいろなることをしました。中学を出ていませんでしたから……。そのころ中田重治という人のホーリネス教会で洗礼を受けてるわけです、十二月、クリスマスのごころです。

浅野 ほう、そう……。

周郷 今考えて見るとあの洗礼は激しい洗礼でした、棺桶みたいな木の桶に水が一杯

入って、白い着物を着せられてそこへゴボンと入れられちゃうんです。そういうことがあったんですけれど、それは、生れた家がいろいろな意味で悲惨、というか金がないで、捨て犬のように夜学の帰りなんかブラブラ歩いたりなんかしていました。

受かっちゃいました。それで一高を受けたけど落ちましたよね。そして次の年一高へ入りましたけれど、一高っていうのに何となくあこがれた……ですね、寮の生活にあこがれただけで勉強しようというわけじゃなかったんです。ともかく三年でいい友だちもできました。ヴァチカンでローマ法王に一番信頼された金山政英君（韓国大使を最後に退官）なんかもそうですし、なくなった小田急の副社長の利光君とか……。

周郷 ええ。十三で洗礼を受けて……、その電機学校を二年半で終えると最低の技術者になれるわけです。その終りころには東京電力の両国の、電気タマ、つまり電球なんかを作る所にいました。ところがたまにまぼくの知合いの電気工夫をやってる人が世話してくれて市川の変電所へ行きました。変電所ですから田んぼの中で自炊してるわけです。その翌年が関東大震災でした。それはぼくが十五歳の時です。

周郷 本郷です。本郷の最後に近いところで。寮も古い寮ですね。きたないけれど精神がありました（笑）。今は建物はいいけれど精神がどこか抜けて物質主義……

浅野 一度行ったことがあるけれど……きたならない所でした。

周郷 ガラス戸も割れているし、二階から小便（寮雨）と称した）をするんです。

だから雨あがりでも暖かくなると臭いわけです。それでも今の寮よりも精神はありません。明治精神というような。

ところが東大へ入ったら……ぼくが東大へ入ったのは昭和五年、一九三〇年、日本が非常に不安定な状態でした。一方では左翼がさわぎ、満洲事変が起こっていましたからね。しかも満洲事変を起こした張本人の島本大隊長というのが、一高に配属された配属将校なんです。張作霖を殺すということを始めた人が、ぼくらの配属将校です。そういう時代でしたから、ぼくは何していいかわからなくて……。あとで金山と話したけど、ぼくも君みたいに外交官か何かになって南米の果てかどこかへ行って詩でも書いてたらよかったですかね、なんていったことがあるんです。みんな法科へ行きませしたけれどぼくは行きませんでした。でも文科っていつでもどこも行きようがないのが教育学へ入りましたが、これはつまらない

いですね。それで亀戸の川のこっち側にある、賀川豊彦の作ったセツルメント、そこへ行ってたんです。そこに寝泊りしちゃったんです。

浅野 ほう、私もあそこへはいっぺん行ったことがあります、ある要件で。

周郷 セツルメントの川向うというのには、もと亀戸の私娼窟みたいところでした。こっちは貧乏な人がいっぱいいますね、あの時期は共産党員の巣窟みたいになって、武田麟太郎なんていう作家が、関鑑

子という人もぼくが行く前に住んでいたりました。一度、寝てましたらあそこに大平警察署というのがありまして、寝込みを襲って全部連れてっちゃったことがあります。ぼくだけ残って誰もないんです。あそこでぼくは、風邪ひいて、それがもとで肺炎から肋膜炎になって、大学の一年半それで終っちゃいました。あとの一年半で卒業しないと、ぼくお金ないですからね。

それであわてて東大の前ではプリントなんか売ってますから、それを買ったりして……。その最後のころに、十三のころと違って、二十二、三のころ、十二月の寒い晩、渋谷のあたりを歩いてたら、きれいな讚美歌の音がきこえるので寒い夜風の中を惹かれて訪ねて行った、そこが浅野先生のところへ行った最初です。

敗戦前後のこと

浅野 あなたは大学を卒業されて、まず文部省へ行かれたでしょう。

周郷 ええ、文部省へやっと入ったわけです、就職難でしたから。満洲事変になって多少よくなりましたが、一般的に失業時代です。

浅野 あなたは文部省に入られてから、もうだんだん教会から遠くなっちゃってね(笑)。

周郷 先生のところのこっち側に小さな家
があって、そこに男が三人で住んでたわ
け。内藤正隆君と竹本宗定君と三人。朝に
なると朝ご飯を先生の家へ行って一緒に食
べました。ところがぼくは文部省へ入っ
て、初めて洋服っていうものを作ったの、
そしたら泥棒が入って洋服とられちゃっ
たんです。そして、もう仕方ないから先生の
洋服着て……先生の洋服長いんですよ、そ
れ着て文部省へ行ったりしました(笑)。
ここで懺悔(告白)したい気持ちがある……
けど結婚とか時勢とかの落し穴——がそれ
は重いのでそれとして、敗戦後の焼跡のあ
る教会に入って、正面の黒々とした十字架
を見ていて涙があとからあとから湧いてひ
とりで泣いた。心の根は先生の教え子で
す。

文部省へ入ったのは、昭和八年夏ごろで
すから日本はますます軍国主義になってま
した。そしてぼくが入ったのが学生部、あ

とで思想局になるわけですが、それが。昭和
十二年が中国の蘆溝橋事件です。この間中
国へ行ったものだからそこへ行こうと思
って行けませんでしたが、マルコ・ポーロ
ブリッジっていうんですね。

浅野 最近中国へ行ったらしたんですか？
周郷 ええ、この夏、やっ。むこうが招
待してくれました。

そういうことで教会に行かなくなりました
たねー。そして文部省に五年はいました。
十二年の支那事変のちょっと前に東大の助
手になりました。十六年には真珠湾攻撃が
あって、十七年に蠟山正道先生、東畑精一
先生なんかで「比島(フィリピン)調査
委員会」というのができて、助手になる人
が必要だということで、その委員会の補助
委員ということで向こうへ連れて行かれま
した。
浅野 あ、フィリピンへ行かれたので
すか。

周郷 その時に先生から電報をいただいた
のを覚えています。『イチロヘイアンライ
ノル』という電報。そして向うで病気にな
っちゃったんです。それで日本へ帰って来
たんですがあちこち逃げて回って一か月か
かって帰ってきました。アメリカの潜水艦
がいるもんですから、船の中も暗くして、
一か月かかりました、輸送船でしたが。

でも一年ちよっとるすにただけで、今
も覚えてますが、ほんのわずかの期間に日
本人の「気持ち」が非常に変わってしまし
た。昭和十八年、戦争末期です。ずっと日
本にいたらこの変化はわからなかったでし
ょうけれど……全然日本は変わったと思
いました。そして帰って来たら、食べ物
ないし、空襲ばかりで、いつ死んでもい
い、死を覚悟したわけでもないのに死んで
も仕方がないという気持ちでした。
浅野 お茶大に入られたのは、その後何年
ですか？

周郷 お茶大は、戦争に負けてから昭和十二年に新制大学に変わりますね。それ以前に、東京という所は焼野原になって、仕事もないし食べ物もないというので、今共同印刷の社長になっている人に絵本の編集をやってくれなんて頼まれて、したりしました。

浅野 いやあ、私はそのころちょうど軍隊にいましてね。

周郷 先生は、戦地には行かれないで、千葉、あ、柏ですね。

浅野 その時、さつまいもとはこんなにもまいものかと、初めてわかりました。

周郷 さつまいも、おいしかったですね。

浅野 それまで食わずぎらいだったんですけれどね。

周郷 昭和二十二年、大学は新制大学になるので、教育学というのを連合軍の司令部の方で重視したわけです。ところが人がいないわけです。九州大学からも北海道大学

からも履歴書送れなんていつてきて、どう

したらいいかわからないでいたら、亡くなった石川謙という先生がどうしてもお茶大に來いといましてね。ぼくも世の中どう変わるかわからないからお茶大にしようということにしたんです。でもあのころ大学

っていつても、冬は寒いし暖房どころじゃないですからね。学生だって今と全然違います。冬は炭を買ってきてフーフ火を起

こしたりして、授業やってたんだか何だかわからないようでした。それで進駐軍の日

本人再教育という仕事、ぼくがたまたま英語ができると思われて、そんなこともしました。

浅野 お茶の水はあなた、何年ぐらい？

随分長いでしょ。

周郷 だから、昭和二十三年から四年前（四十八年）までやってたんです。

浅野 一度、私はあなたのお招きか、ほかの方か、よく覚えてませんがお茶の水へう

かがいましたね。

周郷 先生のお話を学生に聞かせたいと思つて来ていただきましたけれど……、一九五〇年代の終り、だと思えますね。

浅野 そのころ私はまだ教育大学の……

周郷 そう、教育大学の講師でいらして、先生とてもお元気で、あの正門をさつさつと歩いて入つてこられたのを覚えています。

最近の教育はさっぱりわからない

浅野 私ども、最近の教育を、新聞やテレビで表題ぐらい見るんですが、さっぱりわからないですがね。どういふ点が根本的にわれわれの時代と違つてますか、根本、ですが。

周郷 今、先生がいい出された問題——その根本のところか、一番「主要な問題」なんです……。

主要な問題、日本ばかりでなく現代の、世界中で最も重要な問題が、日本では、二の次に扱われているか、いい加減に扱われているか、だと思えます。経済大国というところの二の次とか、重要さを誰も考えないでジャーナリストティックに扱うとか、教育学とか教育、というせまい世界に問題をもつてきちゃって、そこでいじくりまわしている、というのが今の状態だと思います。

浅野 実はね、この夏、松本に「長野県教育センター」がありまして、そこへよばれ、そこで向こうの注文中で『ヨブ記』の話をしてきました。ところがね、もう一人は、「ギリシャ哲学」の話、これもクリスチャンですが、もう一人は例のユダヤ教のマルチン・ブーバーの話、以上がおもな講演だったのですが……、こういうことは今まででなかったことだそうです。毎夏講習会をやるんだけど、いつでも教育技術とか、教育の組織、制度という問題が多く

て、宗教とか哲学とかそういうのは今年初めてだと、いつてました。

周郷 長野県なんかは、昔教育県だったいわれましたね。夏季大学なんていうのをやった、名譽も過去にはしょってわけてあげて。そういう ambition (名譽心) もあるわけです。それがちゃんとしたものかどうかはわからないけれど、それだからやったのだと思いますね。

先生がいい出されたことは、ぼく本当に賛成なんです。教育っていうのは、非常に何かこう、コップの中の嵐というか、ある狭い限られた世界の中の技術的な操作とか、アメリカ占領後、アメリカじゃこういうことがはやってるといふそんな瑣末なことに左右されたり、ある意味で貧血症みたいなになっていると思います。根が全部切れた飾り物みたいな状態なんで、やっぱり宗教的な先生の『ヨブ記』の話とかマルチン・ブーバーの話とかギリシャ哲学の話とか、

そういうようなものを聞いて、「狭くなつて、弾力性がなくてひからびちゃった教育」を、どういふふうに生き返らせようか、という気持ちはわかりますね。しかし、普通はそういうことを考えることすら怠けちゃっています。学校ばかりふえて、幼稚園もそうです。しかし何をやってるのか、ぼくわからないんです、本当のところ。

むかし(旧制)の小学校、中学校で習ったことはもっと簡単なことで、その簡単なことが今でも役に立つ

浅野 われわれ、いやあなたは私より若いから記憶していらっしゃると思うが、われわれの時代は旧制の小学校、中学校(私は高等学校へ行きませんがね)小学校中学校でならったことは、もっと簡単なことでしたよな。

周郷 そう、ここが今先生がいい出されたことだけれど、最も重大なことなんです。

浅野　そしてその簡単なことが、今でも役に立っているんですね。

周郷　そう、そうですね。これは重大なことなんでね、小学校をいたずらに複雑にして、意味もない、あれもこれも教えて、テストに受かりなさいというやり方が、幼稚園の下の方まで影響していますね。

浅野　あ、そうですね。

周郷　下の方は、もっとわかりやすい、単純なことよかったですと思うんですがね。教育はそういうふうに、ただひろがって、幼稚園の数もふえましたけれど、もっとも教育の機能を果していないんじゃないでしょうか。

浅野　私も、関心がないことはないの、読んだり聞いたりするんだけど、わからないんですよ、こまかすぎて。よくあれが子どもたちにわかるもんだなあ、と思っています(笑)。

周郷　そうですね、ぼくもわかりません。ぼく

自身も一九五〇年代から六〇年にかけて、教育というものを考えるには人間とか、人生とか、進化論とか、生物学とか、それから歴史、社会科学とか、「教育という現象がおこっている世界」を「ひろげてみて」、今自分たちがどういう位置にいるのか、ということをやらなければいけないと思いました。

浅野　これは、日本とヨーロッパ、アメリカを比較した場合、違ってはいますか、違っていませんか？

周郷　ある点で、世界中の教育も、人間の生き方そのものが、都市化されたり科学技術が進んだりして世界中共通した問題もっています。しかし、日本の場合、転進というか、占領軍に対する対応の仕方が、かたよった仕方をしましたから、日本の教育はもつと異常で無意味なものじゃないかと思っています。

子どもも「カッコいい」というのが好き

ですね。「かっこう(外見、はやり、外装)」ばかり考えて中身はますます貧乏——なくなってしまうわけです、ところがイギリスでもフランスでも中身——根本のところを考えています。世界のほかの国と違っていい点は、その点です。

日本の外装だけの教育とは全く違う

中国

周郷　隣の中国へこの夏初めて行ったんですけれど、全く驚きました。日本と全く違います。

浅野　それはやっぱり、私も非常な違いを感じました。私がある時感じたのは、中国の教育が、表面的観察かもしれないんですが、非常に画一的でした。

周郷　いや、それは先生が行かれたところは文化大革命のずっと前でしょ？　そしてまだそのころは、ソ連がいた(六〇年代に入るまえ)わけですから。そして六〇年代の

末にソ連が全部引きあげて状態が変わるわけです。画一なんです、大躍進がうまくいかなくて困っていた時代です。

ここでその問題が出てきたので考えてみたいのですが、「画一」ということでは日本の方がひどいですよ。

浅野 現在？

周郷 いや、ずっと。いかにも、民主主義なんていってるけど画一でしょ？ これ。

文部省が全部決めますから。

今度の中国行きは、最初上海から南の長沙、桂林へ行って北京へ帰ってきました。

方々でいろいろな人がいろいろな所を見せてくれて、知識としては知ってましたが、

「民主集中性」という、「民主」と「集中」とは両立できませんね。八億人以上いるところで、全部北京が命令するわけにはいきません。だから省の自治でやりなさい、というわけで長沙なんかでも、教育は教科書もやり方も、実験中だというんです。中央に

よって決められた教科書はないんです。そして小学校の上級からは実際上労働も入るし、工場も農場もあるんです。しかしそういう方法は全部その地方で考えるわけです。基本原理は、北京で共産党大会やなかで決めるんですけれどね。

浅野 また、そうしなきゃ、「少数民族」

というのがありますね。あの学校、少数民族学院、行きましたよ。画的にやろうたつてできませんものね。

周郷 そうです、文字や何か考えたつて。

イギリス人（シユラムという人）いま現代中国研究所の所長で中国の内戦時代のことを書いた人がいます。蔣介石が負けて人民軍が入ってきた時、どうしたらいいだろうつてその土地の人が人民軍に教育のことを相談に行つたら、その問題は自分たちで考えなさい、といったと言うわけで、ところが日本はそうじゃないんです。まだ何もできないころから、教育だけ

命令したんです。アメリカ占領軍の初期の意図にも反して「上からの教育」に迎合しつづけた。

浅野 どうしてそういう点において、文部省というものが、現在オールマイティなんですか？

周郷 ここが、日本の政治というもの、独特な性質じゃないでしょうか。

浅野 そうですかね。

周郷 経済がそうでしょうか？ 農村のこともこのごろは多少考えてきましたけれど、大企業と直接に結びついている自民党政です。経済が中央集権ですね。アメリカ人が驚いてましたけれど、文部省が自民党からじかに指令を受けてるつていうんです。教育も中央集権です。そして日本の国民性もそうでしょうか？ 自分で考えることをしません、考えるほど「器量がない」のか、何でも文部省がいったつていうと口実がたつんです。教科書会社もまたこれにつ

商売します。やたらに文部省の悪口をいって仕方がないし、教師がだめじゃ悪くいったってその資格はないのです。だけど、現実には文部省がすっかり作っちゃって、このわくにはまっていれば必ず俸給が出るという制度です。だから教えるのと教えなさいのというわけです。

浅野 どうしたらいいんですか(笑)。

周郷 これは本当に、最も心配すべきことですよ。

授業から「はずれた余計なこと」それが役に立った

浅野 私がつ通っていた中学、今の日比谷高校ですが、実にいやな中学ですね。一番いやだったのは、一学期ごとに成績順の序列があつて札のかけ替えをやるんです。

周郷 あ、成績で？　むかしの一高もそうなんです。

浅野 そうですか、あれはいやだったな

あ。右の方にあればいいんだが、左の方にあるんだから……。それでも呑気でしたかね(笑)。

周郷 そうそう、しかしふしぎなことに、左の方にあつても誰も卑屈になりませんでしたね。ほこりをもっていました。

浅野 ほこりはもてなかつたけれど(笑)。そして、先生にそれぞれ特色がありました。この間なくなった亀井高孝という歴史の先生、あの人なんかには随分いじめられましたけれどね。そのことから思うと、少し悪い意味において今の学校の先生は、生徒を大事にしすぎるんじゃないですか？

周郷 大事にしすぎる、そう、ぼくが大学にいたころ大学紛争がありましたね。その紛争中だって大学の教授は、昔の先生のようには叱れないんです。なんかこう、生徒の機嫌をとる方に回ります。大学の教授もずるくなった感じがしました。幼稚園でも小学校でも、親もそうです。表面は機嫌

をとっているけれども、成績や試験の点数なんかでいじめてるんですね。心理がたいへん複雑になったんですね。昔は、もっと単純な先生で、ちゃんとお叱られました。

浅野 私はそのころ、学校の授業がおもしろくない、殊に私は数学、理科が弱いものですからね。内外の小説や文学など読まなくてもいい本を読んだり……。そして父兄会、今は父母会、PTAっていうんですか、母からよくお前の父兄会に出るのはいやだよ、一通り終るとほかのお母さんはみんな帰ってしまい、私だけ残されて、あなたの息子は頭はそんなに悪くないが余計なことばかりやってるって小言をいわれるのが辛いところばされました。しかしその時読んだ書物が後に役に立ったといつてはおかしいけれど、それがなければ私は今のよう

に牧師をやっていますよ(笑)。
周郷 その話、いい話ですね。この間なくなられた内藤濯先生は多くの先生なんです

けれど、ぼくの成績をよく覚えてるんです。そしてぼくはまあ上の方なんですけれど一番じゃないんです。それで内藤先生は、あんまり上なんてのはだめだよ、勉強ばかりしてるからっていわれました。一度一番になると落ちるといやだからほかの勉強しないで、ただ勉強ばかりするんでこりゃだめなんです。なくなつた和辻哲郎先生なんて大学で、東大のクラスで一番ビリでした。助手をしていたとき、そのころの成績表を見たのです。

こんなことをやったら日本は亡びます

浅野 それと連関して、私今の子どもが可哀想だと思うのは、遊ぶ時間が充分ないでしょう？ 遊ばせなきゃだめですよ。私のおくには千葉県の九十九里浜でしょ、今みたいに水泳を指導するなんてことはありませんから、目茶目茶に泳ぐんです。そこにど

ぶみみたいな川があってそこで泳いだり、浜へ行って、波が高くて危険でしたけれど、でたらめに泳ぐんです。

周郷 ジャーナリストティックにも今の子どもは遊ばないというのはおもしろいテーマなもんだから、いろいろ調べたりいつたりしてるんですけどね。今の子どもは小さい時から保護されすぎますから、テレビとか、よく食べさせられちゃいますね。それからもうひとつ、高度経済成長で人口移動がひどくて団地というものができます。そうするとその地方にあまり関係ない生活をして穴の中（マイホーム）に入っちゃう、かかわれるわけです。そういうふうな生活が変わって、テレビから食べ物から、子ども用のものができてむしろ「飼いならされる」かたちになった。素朴な物は今ないんです。

浅野 それに、このごろはお母さんも外へ出て働いていらっしやる。でも子どもが外

から帰って、「お母さん！」というの当り前のことじゃないですか？ しかし、冗談じゃなしにこんなことをやったら日本はほろびますね。

周郷 ぼくはもう、実質的には（やっともっている「現象の奥では」）日本の子どもと若者、一大人の方もあやしんですけれど、育つて行くジェネレーションというのが、ほかのどんな国にくらべても、生きて行く力がないと思います。このごろ、子どもの自殺が多いっていうのは、生きる力が弱いということです。簡単に死ぬます。ちょっと何かのきっかけがあれば死ぬようになっちゃったんです。

浅野 そりゃ私だってね、さつき申し上げたように、中学校でいじめられてばかりいましたから、こんなことなら死んだ方がいいと思つたこともありましたよ。

周郷 でも死なないでしょ？ 昔は。浅野 死にませんよ。

周郷 「育ち方」が違ふんです。ぼくは前から考えてましたけれど、簡単に自殺ができるという状態は、簡単に他殺もできる状態なんです、いらいらして。いままでになかった犯罪が増大している。

浅野 そうその通りです。

周郷 だから犯罪がふえてくると、自殺がふえてくるのは確実なことだと思ひます。

浅野 その点で私は、教会で初めて生きて行くというか、そういう意味を学びました。昨年今ごろなくなった森有正君のお父さんに。

周郷 浅野先生の、若いころの先生ですね、森明さん、森有礼の息子さんですね。

浅野 教会で初めて、本当に先生らしい先生、それから友だちを得ました。

周郷 ぼくもそういうふうには十三の時に洗礼を受けて、あとでまた浅野先生の家に、二年ぐらいいました。朝お祈りしてから

ご飯を食べたりしましたね。その時の長男が猷一君、新潟大学の心臓の方の大先生です。小さくてあばれん坊でした。しかしあのあばれん坊があれだけの先生になったので、勉強だけしてたのだったら、もっと違ふと思います。

そういうことがあるもんだから、ぼくはどうしてもせまい教育学者は仲間であつても気が合わないですね。

神さまは人間を画一的にはつくらなかつた

浅野 それから、家には五人子どもがおりましたね。すると何にもいわなくても勉強する子と、やかましくいつたつて勉強しない子と、系統が二つあるんです。時々ふし

ぎに思うんだけれど、子どもは皆持つて生れた天性というものがあつたんだし、全然ほつたらかしじやいけないかもしれなけれど、やかましくいつたつてためな場合もあ

るし、何もいわなくたつて勉強をする子もいるから、もう少し、われわれからいへば神さまから与えられた性格とか能力とかいうものを自由に生かすようにしないとね。可哀想だと思ふんだ。

周郷 ぼく自身のことを考えても、ぼくの兄弟っていうのは、勉強なんかしたのはいないんです。ぼくだけどうしてこんなになつちやつたのになつて、それはちつともいいとは思つてませんけれどこうなつちやつたわけです。いろいろな人を考えると、全然ほかの兄弟と違つてその人だけが何かをやるんです。ほかの兄弟にはその人のやるようなことが全然現われな……何かあるんですね。

浅野 ありますよ。神さまは人間を画一的にはお造りにならないんだから(笑)。教育だつて画一的にしたら悪いのはありませんか。

周郷 いけないんですよ。神を冒瀆する、

ものだな、この画一的に押しつけている教育は。効果は逆になっちゃうわけです。ぼくはよく二宮尊徳のことを考えるんですけど、あれはだれも勉強しろなんていわなかったからしたくなつたわけでしょ？(笑)親が世話したら、ああいう二宮金次郎にならなかったと思うな。だから、今の日本の社会は、それぞれ違ったものをもって生れてきた子どもを、画一的な強制によって、いのちをつぶしてる感じがします。

浅野 そうそう。さっきのあなたの生い立ちのことをうかがってもね、誰もあなたが勉強したって家庭じゃ喜ぶ人もなかったでしょう(笑)。

周郷 喜んでいないどころか……ぼくは变电所に四年半くらいいましたけれど、その間ぼくは自炊ですから、お金使いたくないでしょう。そして家はお金がないもんですから、うまいこといって「博に持たしとくとよくないから」ってみんな持っていって

やうんです。だから全然お金ないんですけども勉強っていうのは、十五歳ごろから一人でやると面白いものですね、あれ、強制されるから面白くないんです。

浅野 今、私の教会に、ある家庭で毎月開かれるドストエフスキーを読む会というのがありましてね。遠いものですからなかなか行かれないんですけどこの間初めて行きましたところ、『白痴』、あれが終りかけていました。私は中学四、五年のころ、わけもわからず読んだものです。その時はまだ日本語が出てなかったんです。それでエプリマンス・ライブラリーというのがありまして、とにかく読んだんですよ。

周郷 はあ、それはやっぱり、もう違いますね。

浅野 何も覚えちゃいません。覚えちゃいないけど、とにかく読んだという……
周郷 じかに、オリジナルのものにぶつかる勇気っていうのは、今はないですね。

浅野 『クロイツェル・ソナタ』もね。あれは一ツ橋の時かな。私はどっかといえどトルストイの方がわかるような気がしたんです。『クロイツェル・ソナタ』も英文からですが、半分ぐらい訳しましたよ。英語の勉強にもなるかと思って。

そういう馬鹿なことを今の学生はするだろうかどうかと思つて……。またしようと思つたつて余裕がないですよ。

人間が人間になる余地(遊び場)がない——少しもかわいくないパンダちゃんばかり

周郷 だけど本当はぼくは、十代から二十代の始めっていうのはね、作ればいくらでも余裕のある年代だと、思いますね。金にならなかつた方がいいんですもの。ちゃんと、余裕つてものを作れる時代なんです。浅野 だから、もっと子どもを遊ばせて、

子どもの自発的な意志を重んじ、あまりさしやわりのないかぎり、それを自由にさせたい方がいいんじゃないですかね。

余計なことをいうようだけど、一中の卒業生で本当にスケールの大きい人間は、出ていませんよね。谷崎潤一郎ぐらいなものでしたでしょう(笑)。

周郷 もとは、一中だけの問題ですけれど、今は、日本中、国をあげて、面白くない人物を作るためのことをやってる感じですね。"教育"っていうんですか、これ。教育と逆のもんじゃないかな。

ただ今先生がおっしゃったように、小さい時から自発的に遊ぶことができるというところが、必要ですね。遊びにはいろいろ危険もともないますけれど……。そういう場所がない。場所がないばかりでなくて、なにか、飼いなされた動物みたいになっちゃってるんです。

浅野 そうそう、そうそう。

周郷 だから、外へ出ると不安になる。だから中にいるんです。

浅野 じゃ、パンダちゃんになっちゃ(笑)。

周郷 パンダなら、かわいいですよ。パンダほどのかわいさはない。

昔は、道路っていうのは遊び場でしたね。体がそう丈夫でない子でも、石で書くのがあって(ろう石)、道路の真中へすわって何か書いたりして……。道路っていうのは子どもにとってはいい場所ですよ？ 先はどこへ行ってるか、子どもの生命そのものと同じで、ずーっと先へ行くと何かあるかという夢ももてる。そして、ちょっと危険になったら家へ帰れる。いい場所ですよ。ところが道路はもう自動車に占領されちゃいました。そして、小さな変な公園なんかで、ここの中へ入りなさいって。あれは牢屋ですよ。

浅野 それで私、いつでも考えるんですけど

れど、小学校なんかの、幼稚園もそうですけど、庭が殆んど全部コンクリートでしょ？ コンクリートの部分もいければ、大半を土にして、なせもつと木をたくさん植えないんだらうと、不思議に思いますね。

周郷 ぼくだってそう思います。全部コンクリートにしちゃって、その中で遊ばないというんで、限定されちゃうんです。ひとたび外へ連れて出ると、遊べないの。

これ、聞いた話ですけれどね。フランスか何かのカトリックの神父さんが、日本の中学生を山へ連れて行ったんです。それで、"今日は何をしてもいいから自由に遊ばなさい"といったら、何していいかわからないんですって。二人ぐらいがちょっと、そばの川へ入ってみただけでまた冷たいから立ってるだけ。何もできないんですよ。と、いうふうに変わっちゃったんで

す。「かこの鳥？」

浅野 でも、今は私のおる渋谷なんかでも危いですものね。

周郷 で、結局は追いつめられて、テレビを見ちゃうんです。

浅野 あ、私はね、テレビっていうお話で、今の日本のテレビは何とかしなきゃいけないんじゃないでしょうか。

周郷 本当にいきませんよ、あれは。

浅野 あなたもご存知の西村一家が一年ばかりストラスブルグに行っていましたね。

テレビをフランスでは子どもには見せない。ですから今でも自分の家はテレビを持ってないんです。私の家になると夢中になって見えています。

周郷 日本へ帰ってくると、そういうふうになっちゃうんですよ。むこうはみんなが子どもには見せないんですから。

周郷 この間、日高六郎さんに聞いたんですけれど、パリにしばらくいましたけれ

ど、子どもにジュースとか、コカ・コーラなんか絶対飲ませないそうです。

子どもなりのイマジネーション（想像力）と考える力をつぶしてしまっている

浅野 そしてテレビを見ますよね、場面がどんどん変わって行くでしょ？ テレビを見ながら物を考える、なんてことはあり得ませんね。子どもだって目先の物についていくというだけで、子どもなりに考えるということができません。

周郷 そう、子どもっていうのは、大人よりももっと哲学的なことも考えられるわけでしょ？ そのチャンスを全部奪っちゃうんです。まわりが変わって行く、その刺激で生きているっていう感じですよ。大人が想像するよりもっと本質的な意味で哲学的なことを考えている人間なのに。

浅野 とにかくイマジネーションがね、子

どもには、

周郷 精彩があつて、大人にはかなわないような、それを子どもは自慢しないからわからないけれど、実質では考えてるわけです。そういう機会を全部奪っちゃうんです。テレビ、教育、それから子ども目あての出版物と子ども目あての食品会社ね。もつと思いついていえば、幼稚園というのも、これをこわしてるわけです。子どもの創造力を、そのまま生き生きとするように育てているんじゃないかね、幼稚園の都合でコントロールするわけです。

浅野 私はもう、NHKに行くたびに文句いうんです。相手はハイハイっていいですよけれど（笑い）どれだけ本気で聞いてくれるか解りません。

周郷 大体、子どもにサービスするという産業が多すぎますね。テレビもそうですし……。玩具もそうですよ？ そしていい玩具は一つもないんです。「子ども」という

ものを囮おとりにして、金もうけをしてる人が多過ぎますね。

浅野 われわれの時代は、殊に田舎でしたから、玩具のようなものは自分で作りましたよ。

周郷 そう、ぼくもそうでした。

浅野 たとえば竹馬なんかも自分で作りました。

周郷 竹馬でも、作ればね、自分で作ろうとして一生懸命自分でやるんですから……。一つの物を作るためには、いろいろな知識も必要だし……。

浅野 竹を切りに、竹藪へ行く。そこから始まりますよね。

周郷 どういう竹がいいか、選ぶところから、物を見る目」というのが訓練されて育っていくわけです。そういうことが全然なくて、「全部与えられちゃう」のね。

中国の子どもはそういう玩具なんか、ほとんどありません。夕方なんか、お父さん

の自転車のうしろに乗ってずーっとどこかへ行く、これが楽しそうなんですよ。一緒に親子で夕涼みをしたがら歩いて行くと、清潔な感じがしました。そしてみんな親の手助けをしています。子ども相手の店もありませんかね。

宗教的なものが不可欠——中国の共産主義は一つの人民の宗教

周郷 ぼくはティール・ド・シャルダンのこと前から中国へ行きたいと思っていました。しかしその後中国が、文化大革命後なお、子どもたちの育ち方や何かどう든変わって来ていると思います。行って、見たからわかるというものでもないし、今までもイギリス人の書いたものや、いろいろ、読んではいましたが、毛沢東の生れた家というのへ行った時、直感的に、「イエスキさまのような人だ」と思いました。だから、ソ連の共産主義と、中国の共産主義は

違うんだなと思いました。帰ってきて、前に読んだ本をまた読んでみますよ。そうだなということがわかります。これはドゴールの片腕のような、文部大臣もやったようなアラン・ペールフィットという人の本です。(アラン・ペールフィット『中国が目覚めるとき世界は震撼する』白水社刊) 中国の共産主義は、非常に宗教的なんです。むしろ宗教的というより道徳的、倫理的なんです。

浅野 人間と結びついたような道徳的ですね。

周郷 そういう意味でいえば、宮本顕治の日本共産党と折合いのつかないのは、当然です。

この本によると、毛沢東っていう人は、いろいろな目にあってるんですが、家族全部が犠牲になるわけです。自分の子どもも朝鮮戦争で死にますしね。自分だけが、捕虜になったりしながらも、ともかく八十三

歳まで生きるんです。彼自身が絶対無私の精神、人民に服務するという精神で一生を

貫いています。毛沢東だけが貧民の出身です。周恩来でもなんでも、ちょっと身分のある家なんです。毛沢東という人は「大地の子」だと、ペールフィットはいっています。そして、まだ若いうちから中国の軍閥と外国の勢力と地主のもとで悲惨な状態になっている中国をどう救うかということ、共産党になる前から考えていたんです。毛沢東にとっては、女性と、圧迫されている農民が神なんです。この神の声をきいて生きようと思った、という感じがするんです。また「人民は神であって、毛沢東はその予言者である」と書いてあります。ぼくはこれ、わかる気がします。「中国共産主義は一つの人民の宗教」ここがソ連と違うところです。スターリンのことも書いてあります。「中国の人民が毛沢東をしてこれに信仰することで生きかえると感

じたようには、ソ連の人民はスターリンに対して感じていない」ということも。

「一九三五年、第二の長征のモーゼである毛沢東は神意を告知するものであって、すなわち司祭である、そしてしもべであると同時に指導者でもある、彼は、神なる人民に仕え、神なる人民を良導する代願者の役を演じている」これ、フランス人が見ているんですけれど、ぼくが直感的に感じたこととどこかで合っているんです。これにくらべると、日本にはそういう人がいない。日本の神さまは、お金とGNPと学歴なのか。

浅野 とにかく毛沢東という人は、スケールのかい人ですね。(先生はペールフィットの本を買って読んでみたいといわれ、編集部から先生にとどけることにした) 周郷 失敗もしているところがまた魅力があります。

浅野 矛盾もずい分ありますけれど。



ここでちょうど三時になり、お二人のお話に熱中していた私たちに、浅野先生はさりげなく「私、少々つかれましたが、まだつづきますか」とニコニコしておっしゃいました。今年七十八歳におなりの先生はお顔の色つやもよく、見事な白いひげをのばしていらして、モンベの上下のようなお召物を召して、ちょっと高砂のおじいさんのような感じがいたしました。あとでうかがうと、椎間板ヘルニアで、長時間いすに腰かけていらっしやるとおいたみになるとか、大変申しわけないことをしたと、ただただ恐縮いたしました。でも先生はそのことをおっしゃりながらもにこやかで、周郷先生も全く教え子というか弟子というか、ほほえましいお二人のごようでした。

(一九七七年一月一九日)